文苑

システイーとドミノー（續き）

安井てつ

システイーは澤山に色々の玩具を持つて居ましたが、ドミノーといふ玩具が一番好きでした。ドミノーと云ふのは色々、數の書いてある板を並べて遊ぶ面白い玩弄ですが、システイーのは此板が象牙で出來て居ましたから、大層、奇麗で其上、高價のでした。

或日システイーは一人自分の部屋で此板を並べて遊んで居ました。

すると父親がはいつて來て、

「システイー、お前は之が一番好きか、」

と云つて頭をおなでなさいました。

「えゝ、大好きですよ、父樣」

とにて〳〵しがら父親の顏を見上げました。

「システイー、若、母樣が今其箱を此窓から外に投げ出しなすつたらどうする。此奇麗な板が皆毀れてしまつたらお前は嘸、いやだらう、どうだ」

と何やら譯がありそうに云はれましたので、システイーは父親の心が分り兼ねて不思議さうに唯、顏を見つめたぎりだまつて居ました。

「けれども若、此箱を魔法つかひか何かゝ急にあの奇麗な薔薇の植つて居た淺黃と白の植木鉢にかへて〳〵れたら、嘸よからう、そをしてそれを母樣の御室の窓にせんの樣にかざつたらお前は、嘸、嬉しからう」

「おゝ、若そうならば本當にいゝでせう、どんなでせうね父樣」

「本當にそうだ、けれども唯しようと思つた計ではいくら善い事でも役に立たぬ、善い事をすればこそ初めて前にした惡い事を取りかへすことが出來るのだ」

と云ひ乍ら父親は戸をしめて外に出かけて行きました。

システィーは此父親の言葉には何か譯があるに違ひないと思ひましたが能く分りせんでした、けれども其面白いドミノーも遊ぶ氣になりませんでしたから其日はもうそれで遊びを止めてしまひました。

翌朝システイーは一人で庭の木の陰に腰を掛けて居ますと此時、庭を散歩してゐた父親が、丁度其處に來かゝりましたがシステイーを見て急に其前に立ち止り、

「システイー、父樣は、これから外に運動に行くがお前も一所に來ないか、そして其時ドミノーを持つてお出で、少し其玩具を見せたい人があるから」

と云はれてシステイーは直に走つて行つて自分の部屋から大切な大切な玩具を持つて來ました。

「さあ父樣行きませう」

とシステイーは大喜びで父親と一所に外に出かけて行きましたがやがて少しするとシステイーは立止つて、

「父樣、此處に來ても仕方がありませぬ、魔法つかひも何も居やしませんもの」

「なぜ」

「えゝ、そんならどうして父樣此ドミノーの箱をあの薔薇の植木鉢にかへる事が出來るのですか、えゝ、父樣」

此時父親はシステイーの肩に手をかけながら、

「システイー、誰でも本當に善い事をしやうと思ふ人はいつでも二つ宛の魔法つかひを自分につれて居るよ、一つは此處」

と云ひながらシステイーの額に手を當て、

「一つは此處さ」

と云つて今度はシステイーの胸に手を當てました。
「父様、何の事ですか僕にはちつとも分りませんよ」
とシステイーは不思議そうな顔をして父親の顔を見上げました。
すると父親は笑ひながら、
「それではお前にわかるまで待つて居やう」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

或日システイーの母親が自分の部屋に用があつて來ましたが急にびつくりして、
「おやまあ、あの薔薇の花は……」
と云ひながら急いで下に降りて來まして、
「あなた一寸いらしつて下さい」
と良人を呼びました。
「おゝそれはシステイーがしたのです、自分のお金で買つたのです、とう〳〵これで、此間の悪い行を償ひました」
と云はれて、
「なに、まあ、そうしてお前のあの大切にして居たドミノーの箱を賣つたつて、
あゝ、なに、いゝよ、明日一處に行つて買ひ戻して來ませう、いくら高價てもいゝからねえシステイー」
と母親は十分の同情を以て側に立つて居たシステイーを見ました。
「どうだ、システイー、買ひ戻そうか」
と父親もちつとシステイーの顔を見ますと、
「いゝえ、いりません、いりません、折角したのに」
と云ひながら、ひしと父親の胸に抱き付いて眞赤な顔をかくしました。
父親はしつかと其子を抱き占めながら、母親の方を向いて、靜に、

「あゝ、御覽、此兒は今日初めて眞の嬉しさを知つた、善い事をした時の眞の嬉しさを、如何に子供でもすべき事は必ずさせねばならぬ、いくらつらい事でも自分の過で、できた事はどこまでもこらへさせねばならぬ、どうか此兒の死際までも此教は忘れさせたくないものだ、之が本當に私の願ひです。」

車のわだち

撃水生

背て鄉關を出づるや「業若不成死不歸」と歌ひあはれ、錦を着て歸らずば、骨となつて歸らんをまで盟つて遊學せし身の、脆くも紅塵萬丈の春に醉うて淺ましき身の成り行きを新聞雜誌に歌はるゝ者多かるなかにも、雪を集め螢を友とせし古人に劣らぬ苦學をなして初一念を貫徹せんとする學生の時に吾人の耳目に觸る

▲或年の師走の暮雨持つ夕方の空は、夜に入りて、吹き荒ぶ、北風に雪と化り見る〳〵二三寸が程も降積りぬ。

吾は宵の程より、下宿屋の一室に閉ぢこもりて、消えのこりたる埋火かきおこしつゝ、火影淋しき孤燈の下に、讀みさしたる書片つけんとする折しも、時針は一時を指しぬ、あまりに深してけりと思ひながら、いざこれよりがイデンの園ぞと支度にかゝれる時二輪の空車を引く音、表に響きつゞきて、車夫の話も聞へぬ。

「オーサムー、何だか、夜が更けるとべらぼうに寒くなつてきた、まるで、手の先が、ちぎれ相だ……時に、さつきからの問題ヂー、どうも、君の議論はどこまでも、タウトロヂー(反覆法)としか考へられないね。それに、もーAが……」

「まう宜いさ。夫よりかも、明日の問題の答を考へ